

浦谷古墳群Ⅲ

宗像市文化財調査報告書

第36集

1992

宗像市教育委員会

浦谷古墳群Ⅲ

宗像市文化財調査報告書

第36集

1992

宗像市教育委員会

序 文

宗像市は福岡市・北九州市の中間に位置し、両大都市への通勤圏となっており、両政令都市間の中核拠点都市としての様相を濃くしています。

本市はこのような状況の中で、施策の柱とも言える「学術・文化・国際交流都市」を目指して、着実に歩みを続けています。

宗像市の南部、鞍手郡若宮町に近く、自由ヶ丘団地に隣接して位置する浦谷古墳群は、この地区の宅地造成に先行して緊急発掘調査された遺跡です。

当古墳群は7基で構成しており、50基を越す浦谷古墳群の調査の中で、1支群を形成しています。調査では6世紀に築造された円墳であることがわかりました。

この地域では、これまでの発掘調査から古代鉄生産に関わり深いことがわかってきました。今次調査では直接に関連する資料を得ることはできませんでしたが、古代のむなかたを解明する上で貴重な調査となりました。

これとは別に、事業地の一角に分布する朝町山ノ口23号墳が、古墳公園として保存活用することになったのは幸いであったと言えます。

本書が、広く文化財の保護および学術研究の資料として貢献することを念願するとともに、発掘調査に参加された方々の労苦と、ご協力いただいた関係者一同に対し心から感謝の意を表する次第であります。

平成4年3月31日

宗像市教育委員会

教育長 森 下 照 清

例 言

1. 本書は、宗像市教育委員会が、宅地造成に伴い、緊急発掘調査した浦谷古墳群K区の調査報告書である。
2. 発掘調査は平和農産工業株式会社から委託を受けて、宗像市教育委員会が事業主体となって行った。
3. 遺構・遺物の実測・写真撮影は安部が行った。
4. 製図は牧野淑子が、遺物整理は法泉順子・高木成子・田島圭伊子・篠原啓子・上野陽子が行った。
5. 本書の執筆・編集は安部が行った

本文目次

第1章	はじめに	1
第2章	位置と環境	2
第3章	調査の概要	6
第4章	発掘調査の記録	9
第5章	まとめ	25

挿図目次

第1図	周辺の遺跡 (1/50,000)	3
第2図	事業計画図 (1/6,000)	7
第3図	遺構分布図 (1/6,000)	8
第4図	K区地形測量図 (1/200)	10
第5図	地山整形図 (1/200)	11
第6図	SO1主体部実測図 (1/40)	13
第7図	SO1出土遺物実測図 (1/2・2/3)	15
第8図	K区出土遺物 I (1/3)	16
第9図	浦谷古墳群A群地形測量図 (1/300)	18

第10図	浦谷古墳群A-4号墳主体部実測図(1/40)	19
第11図	浦谷古墳群F群小石室実測図(1/30)	20
第12図	浦谷古墳群A区溜り出土遺物(1/3)	21
第13図	浦谷古墳群A区出土遺物(1/3)	22
第14図	浦谷古墳群A区出土遺物(1/3)	22
第15図	浦谷古墳群B区出土遺物(1/3)	22
第16図	浦谷古墳群D区出土遺物(1/3)	22
第17図	浦谷古墳群F・I群地山整形図(1/300)	23
第18図	浦谷F-3焼土坑(1/20)	24

図版目次

図版1	浦谷古墳群航空写真(1/12,500)(A~Lは各支群)
図版2	浦谷古墳群K支群遠景(西から)・浦谷古墳群SO1調査区(北から)
図版3	浦谷古墳群SO1調査区(東から)・浦谷古墳群SO1石室全景(西から)
図版4	浦谷古墳群SO1石室玄門(東から)・浦谷古墳群SO1石室左側壁
図版5	浦谷古墳群SO1石室右側壁・浦谷古墳群SO1石室奥壁
図版6	浦谷古墳群SO1主体部(東から)・浦谷古墳群SO1墓壇土層
図版7	浦谷古墳群全景(北から)・浦谷古墳群D支群全景
図版8	浦谷古墳群A支群小石室・浦谷古墳群F支群(左下の森林はK支群)

第1章 はじめに

1985年4月10日付で、大字朝町地区の約32万㎡に及ぶ宅地造成に伴う、埋蔵文化財の有無についての照会が、平和農産工業株式会社からあり、現地踏査と試掘を行ったところ、2カ所で6基と1基の古墳の所在を確認した。協議の結果、朝町山ノ口23号墳については公園として保存・整備するものとし、6基の古墳については緊急発掘調査を実施して記録保存をすることとなり、1987年5月11日～8月4日にかけて現地調査を実施した。

1988年12月に、同地区の都市計画法第32条に開発協議が出され、(1988年8月21日付宗教社発第837号の埋蔵文化財発掘調査完了届)、工事は着工された。

工事が終了に近づいた1991年3月に、宗像市内の遺跡詳細分布調査のため、同工事区との隣接地を踏査した際、事業地と境界をまたがるようにして分布する古墳群が存在することがわかり、一部の古墳は既に工事で改変を受けていることがわかった。このため、急拠事前協議を図り、当市教育委員会による事前調査の不備を謝罪するとともに、幸いにして緑地帯に残る5基の古墳は現状のままとし、工事により改変を受けた古墳について、緊急に発掘調査を実施した。

1991年5月14日付で同社から、文化財保護法第57条の2第1項の届出が成され、これを受けて、1991年5月15日付で同法第98条2第1項の通知を行い、同年5月14日から発掘調査に入った。同5月31日に現地調査を終了し、資料整理を行った後、同年3月31日をもって事業を完了した。

発掘調査の組織

総括	宗像市教育委員会	教育長	森下照清
		教育部長	中山宏基
		社会教育課長	吉田繁利
		文化係長	尾山清
庶務・会計		主事	北野隆文
発掘調査		主事	安部裕久

発掘調査において、天候不順の中での調査に参加いただいた方々、また、調査全般にわたって協力いただいた事業者に対し、心から謝意を申し上げます。

第2章 位置と環境

宗像市の東南部は、鞍手郡若宮町・宮田町が隣接する。宮田町の藤山（標高296.9m）から北西方向の宗像盆地へ派生する丘陵上に浦谷古墳群が位置する。

自由ヶ丘地区は開発が早くに始まっており、相当数の遺跡の存在が、聞き取りによってうかがうことができるが、ほぼ壊滅状態となったのは惜しまれる。

弥生時代の遺跡は、朝町町ノ坪遺跡で、中期の円形住居跡群が調査されている。朝町竹重遺跡では盛土を明瞭に有する土壌墓・木棺墓群と小児の甕棺墓が検出され、銅戈・銅矛・鉄鉞が出土している。光岡長尾遺跡は標高30mの丘陵上に掘られた環溝遺跡であり、貯蔵穴から土笛の出土があった。野坂一町間遺跡では中期の掘立柱建物が検出されている。

釣川の支流である荒堀川、高瀬川の流域は宗像の中で現在に至るまで、最も農業生産性の高い地域であり、緑辺の丘陵上には重要な遺跡の分布があり、弥生時代の青銅器出土分布もここに集中している。まさに弥生時代の中心集落がこの地域で営まれていたものと考えられる。

調査地から道路を挟んだ南側丘陵上には、鉄銚・鉄錐を古墳の横穴式石室内に副葬していた朝町山ノ口遺跡がある。北からの谷地を挟んだ丘陵の朝町百田遺跡から鉄滓が古墳の横穴式石室内と土師器埋納状態で出土した。また、西方の野坂一町間遺跡の住居跡から、鍛冶炉と鉄滓が出土しており、宗像市南部域の大字朝町・野坂を含む旧南郷地域では5～8世紀にかけて、鉄生産に携わっていた集団の存在が考えられる。この鉄生産に関して、野坂一町間遺跡出土の鉄滓分析から、素材は鉄鋼石であるとの結果が出ており、分析資料は少ないながら、古代の鉄生産が、宗像郡の海岸に包蔵する砂鉄を原料としていたとする推定を考え直すことになった。

この地域の須恵器窯が浦谷古墳群D群中に1基と朝町木山遺跡の窯跡が確認されており、釣川中流右岸に分布をもつ大字須恵・稲元を中心とする窯跡群とは別の小グループの生産集団の存在が考えられる。

宗像最古の前方後円墳である東郷高塚古墳は、南郷の沃野と釣川の中流を望み、津屋崎町の新原・奴山へ抜ける交通の要所に立地しており、古墳時代最古の首長墓であるが、この古墳に直接系譜のつながる前方後円墳は確認されていない。



第1図 周辺の道路 (1/50,000)

表 周辺の遺跡一覧

番号	遺跡(遺構)名	所在地	調査の概要	文庫
1	稲元古墳群 I	宗像市大字稲元1350他	古墳7(米測花消滅1) 刀子 鉄鏡 カンナ 須恵器 土師器	1
2	稲元古墳群 II	宗像市大字稲元1403の1	古墳5 火葬竈1 蔵骨器1 鉄刀 土師玉 須恵器 鉄鏡	2
3	稲元日鏡原遺跡	宗像市大字稲元1304他	築跡4 須恵器II~III 土馬 粉砕車	3
4	稲元久保遺跡	宗像市大字稲元1222他	貯蔵穴5 土師器15 土師12 古墳14 横穴墓(田群48墓道72主体) 地下式横穴墓3 柱穴群1 近世墓1	
5	須恵クビノ浦遺跡	宗像市須恵387他	古墳2 石蓋土師器1 蔵骨器1 須恵器 土師器 陶磁器	
6	三郎丸古墳群	宗像市三郎丸589他	前方後円墳1 住居跡 貯蔵穴	4
7	三郎丸前田遺跡	宗像市大字三郎丸652の11他	1号墳(主体部未調査・溝中に土師器) 2号墳(埴瓦・主体部とも不明) 3号墳(削竹彫本棺・土師器・鉄鏡・鉄鏝) 4号墳(土師器7)	
8	駿蔵寺宇土遺跡	宗像市大字駿蔵寺230他	5号墳(主体部不明) 6号墳(横穴式石室) 7号墳(横穴式石室・須恵器・貯蔵穴) 8号墳(土師器) 9号墳(横穴式石室・須恵器)	
9	石丸原遺跡	宗像市大字石丸581他	古墳1 須恵器	
10	武丸大上杉遺跡	宗像市大字武丸2041他	古墳2 須恵器	5
11	石丸遺跡	宗像市大字石丸(宮ノ前)365の1	貯蔵穴住居跡2 掘立柱建物3	6
12	久保遺跡	宗像市大字久保99の1	古墳1 溝1 土庫1 貯蔵穴11 炬形竈白磁	
13	久保遺跡	宗像市大字久保388他	住居跡11 貯蔵穴1 溝	7
14	曲成把遺跡	宗像市大字曲成1102他	貯蔵穴 土師器 埴瓦 住居跡 古墳 溝	
15	光岡原遺跡	宗像市大字光岡69の1他	包含層	
16	光岡草場遺跡	宗像市大字光岡588の1他	住居跡 埴瓦 貯蔵穴 古墳 A区 字小幸田9011か B区 字立浦10515か	8
17	王丸河原遺跡	宗像市大字王丸36他	土庫墓24 埴瓦墓2 古墳1	9
18	大徳町原遺跡	宗像市大字大徳町275他	住居跡11 掘列3	
19	大徳町町口遺跡	宗像市大字大徳町180他	古墳3 小石室1 掘立柱建物	10
20	野坂一町間遺跡	宗像市大字野坂2278他	古墳5	9
21	野坂ホタテ遺跡	宗像市大字野坂915他	住居跡 鉄棺	10
22	武丸岩倉遺跡	宗像市大字武丸1149他	掘立柱建物25 木棺墓1 溝10	11
23	八野宮遺跡	宗像市大字吉留(宮ノ尾)3186他	古墳5 中・近世墓	12
24	富地原神岡崎遺跡	宗像市大字富地原2005他	築壇遺構 掘列墓	
25	富地原香形遺跡	宗像市大字富地原1938他	住居跡	
26	富地原森新遺跡	宗像市大字富地原1879の1他	包含層	
27	吉留茶田遺跡	宗像市大字吉留1587他	住居跡 井戸	
28	武丸高田遺跡	宗像市大字武丸669他	住居跡 埴瓦墓	13
29	武丸小伏遺跡	宗像市大字武丸279他	住居跡 掘立柱建物 鉄棺	9
			住居跡 包含層	9

30	富地原古賀下遺跡	宗像市大字富地原1403他	包含層	
31	富地原岩野遺跡	宗像市大字富地原1482	掘立柱建物 溝	
32	富地原藤遺跡	宗像市大字富地原1113他	住居跡 石棺墓 井戸 土壇墓 溝	
33	富地原梅木遺跡	宗像市大字富地原1733他	住居跡 貯蔵穴 土壇墓 古墳	12
34	富地原小嶺遺跡	宗像市大字富地原1714 1702 1710	住居跡 貯蔵穴 土壇墓 古墳	13
35	徳重仏祖遺跡	宗像市大字徳重38他	貯蔵穴 古墳	
36	徳重高田遺跡	宗像市大字徳重23の2 27 24他	古墳 石棺墓 祭祀土壇	
37	名残高田遺跡	宗像市大字名残95 97他	貯蔵穴 古墳 住居跡	14
38	富地原大原遺跡	宗像市大字富地原443他	古墳 火葬墓	15
39	名残藤河内遺跡	宗像市大字名残96他	古墳	15
40	名残長浦遺跡	宗像市大字名残46他	古墳	15
41	徳重城遺跡	宗像市大字徳重358	近世墓	
42	名残小田代遺跡	宗像市大字名残1127の1他	包含層	
43	名残木山遺跡	宗像市大字名残1083の9他	焼土壁	
44	朝町木山遺跡	宗像市大字朝町616他	竪跡 須恵器	
45	朝町百田遺跡	宗像市大字朝町616の2	古墳 火葬遺骨跡	
46	名残柿木田遺跡	宗像市大字名残919他	中世土壇	
47	朝町砂見遺跡	宗像市大字朝町822-1他	古墳	16
48	朝町町ノ坪遺跡	宗像市大字朝町2002他	住居跡	
49	野坂大木遺跡	宗像市大字野坂2798他	包含層	
50	朝町竹重遺跡	宗像市大字朝町2464の2他	古墳 土壇墓 妻棺墓	
51	野坂中松元古墳群	宗像市大字野坂2847他	古墳 9 (未調査破墳 2)	
52	野坂中松元古墳群	宗像市大字野坂2863他	古墳 8	
53	朝町山添遺跡	宗像市大字朝町2235他	溝	
54	朝町官作遺跡	宗像市大字朝町2240	古墳	
55	野坂中山遺跡	宗像市大字野坂157他	掘立柱建物 溝	
56	浦谷古墳群 I	宗像市大字朝町1019他	古墳39 未調査消滅3 黒埴1 火葬遺骨器1 小石室5 埴納遺構2 焼土壇4 鉄刀 鉄鏃 杏葉 鍬 刀子 須恵器 土師器	17
57	浦谷古墳群 II	宗像市大字朝町1124他	古墳 6 F区 2 J区 4 朝町山ノ口23号墳は保存 鉄刀 鉄鏃 須恵器	18
58	浦谷古墳群 III	宗像市大字朝町1662の5	古墳 7 (1基調査) K区	19
59	朝町山ノ口遺跡	宗像市大字朝町1627	古墳23(23号墳は字平畑1604・1605)	20
60	沙井嶽原古墳群	藤手郡若宮町大字沼口469の3-4	古墳 4 (沙井嶽古墳群日支群47~50号墳)	21
61	沙井嶽古墳群	藤手郡若宮町大字沼口	古墳38	22

第3章 調査の概要

浦谷古墳群は、1981・87年と2次にわたる調査を実施して、A～J群の10支群に分けることができたが、2次調査において支群の変更が生じたため、今次調査のK支群を含めた古墳群の群構成と調査成果をここにまとめておきたい。(墳墓をA～K群に分ける)

A群 古墳1、小石室1、未調査消滅古墳2。ここから6世紀～7世紀の土器が出土しており、A群とは別の1支群が想定でき、新たにM群として設定する。

B群 古墳1

C群 古墳6、小石室4。

D群 古墳12

E群 古墳2、未調査消滅古墳1。

F群 古墳6

G群 古墳5

H群 古墳7

I群 古墳1

J群 古墳4

K群 古墳1、未調査古墳6。

焼土塊 F群中に2基、G群中に4基。

埋納遺構 I群中に1基、H群中に1基。

火葬墓 I群中に1基

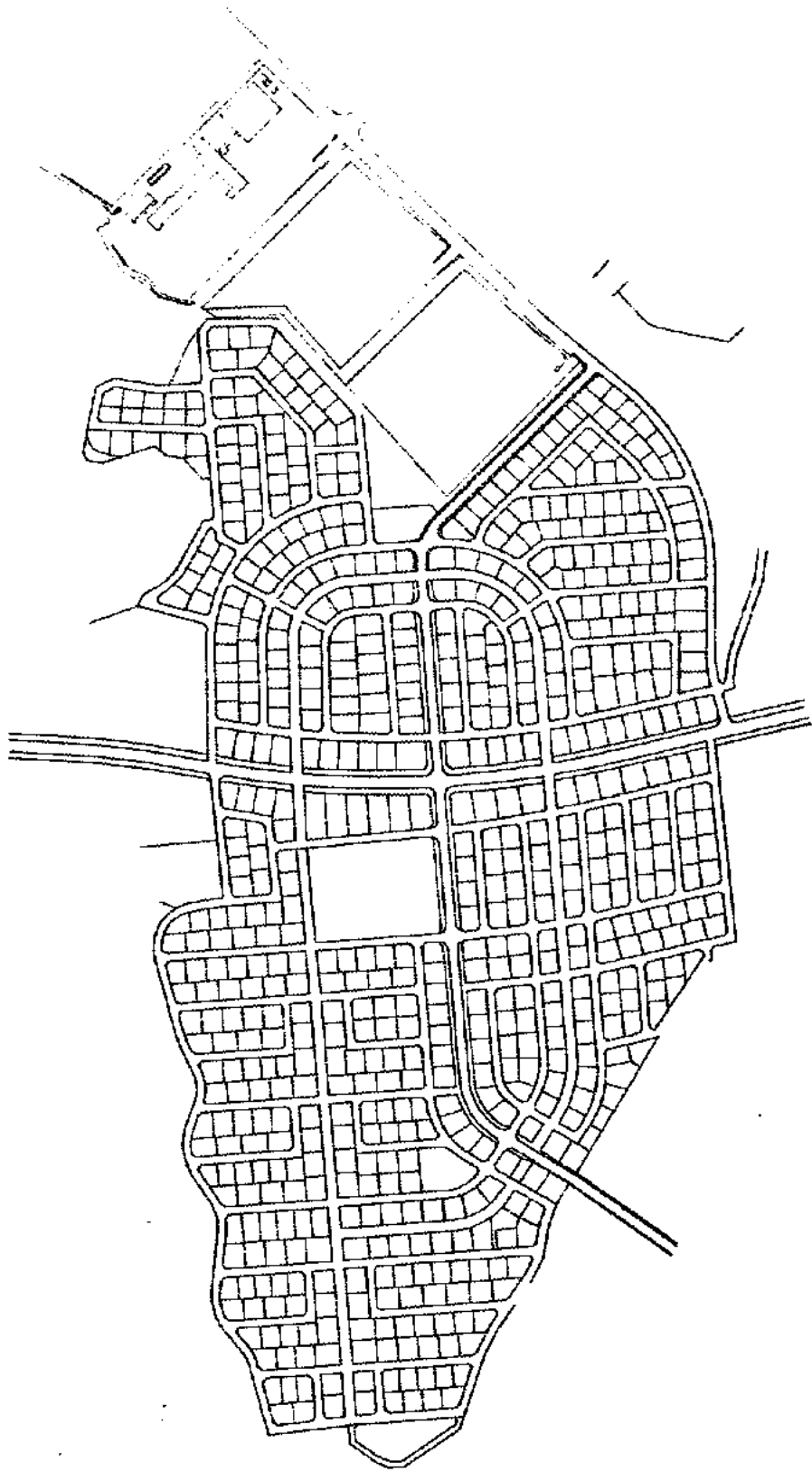
窯跡 D群中に1基

この他に、西側造成地に朝町山ノ口23号墳が確認され、2次調査の段階で保存・整備することが決まり、3次調査中に整備が完了した。

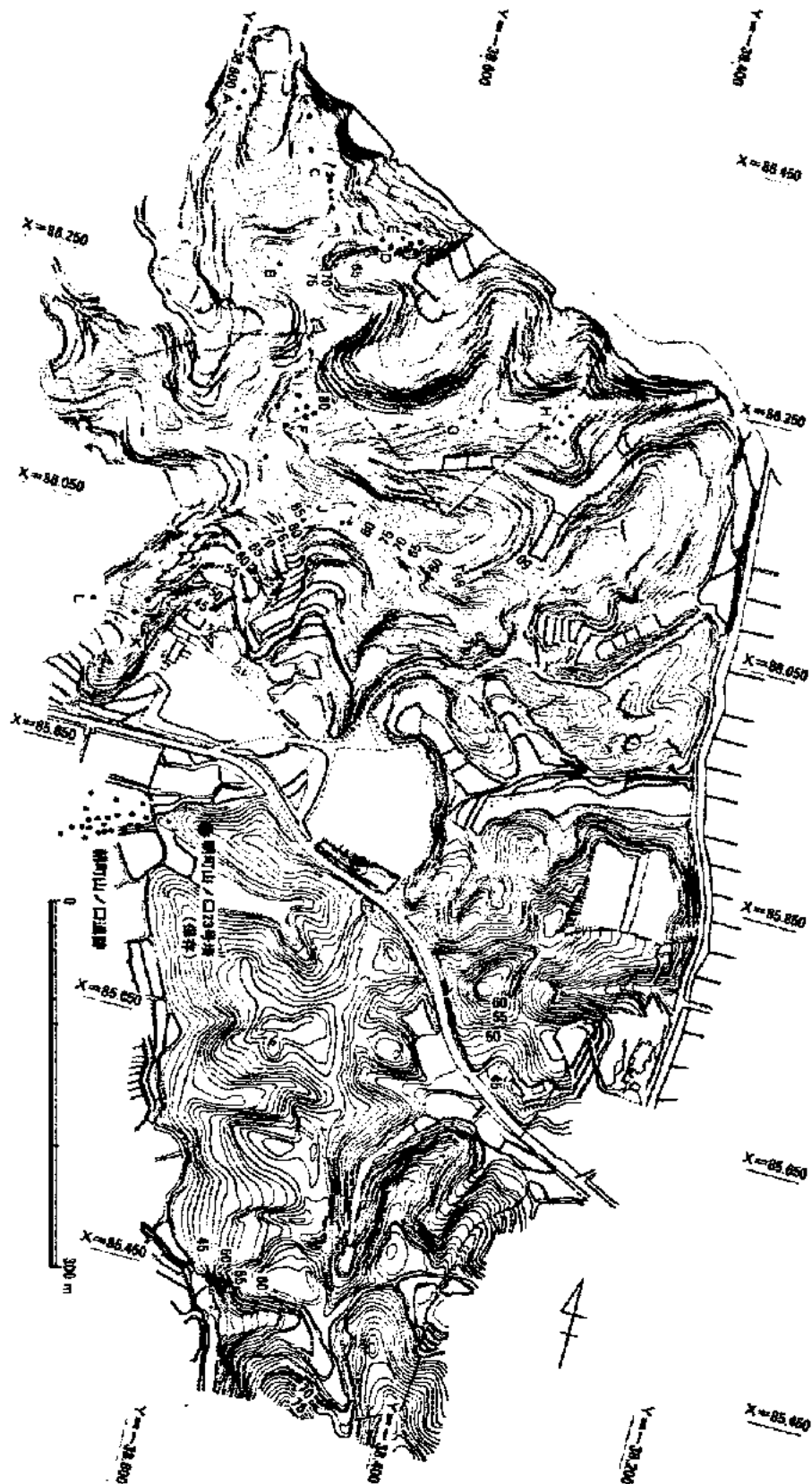
K群と枝分かれした北側小支丘にも古墳の分布があり、同古墳群は築造時期や立地等から13支群で構成されることがわかった。

浦谷古墳群Iの報告中で5世紀～6世紀前半に築造された古墳群をI期の古墳群としてA・B・C・E・Iの5支群を当て、7世紀初めから築造の始まる古墳をII期の古墳群としてD・F・G・Hの4支群を当てていたが、今次まで調査を検討した結果、A群中で出土したII期古墳に相当する土器から新たにM群を設定し、事業区外のL群を含めて、II期の古墳群を8支群とする。

K群の古墳の築造は6世紀のものであり、D群中の遺物に6世紀のものを含むことから、II期古墳説の成立は6世紀後半の時期には始まるものと考え、従来のII期古墳群の成立時期を訂正したい。



第2圖 事業計畫圖 (1/6,000)



第3圖 遺構分布圖 (1/6,000)

第4章 発掘調査の記録

浦谷古墳群は、藤山(296.9m)から北西に派生する舌状丘陵のうち、最西端に位置する丘陵からさらに北西に延びる独立丘陵上に分布している。この丘陵は、八手状に枝丘陵をもっており、これらの丘陵上には、A～Mの古墳群が形成されている。これらのうち、K支群が形成されている南枝丘陵が、運動公園の施工によって著しい改変をうけて遺構の分布状況や残存状況などをうかがいしることができなくなった。そこで、今回の発掘調査が実施されることとなった。

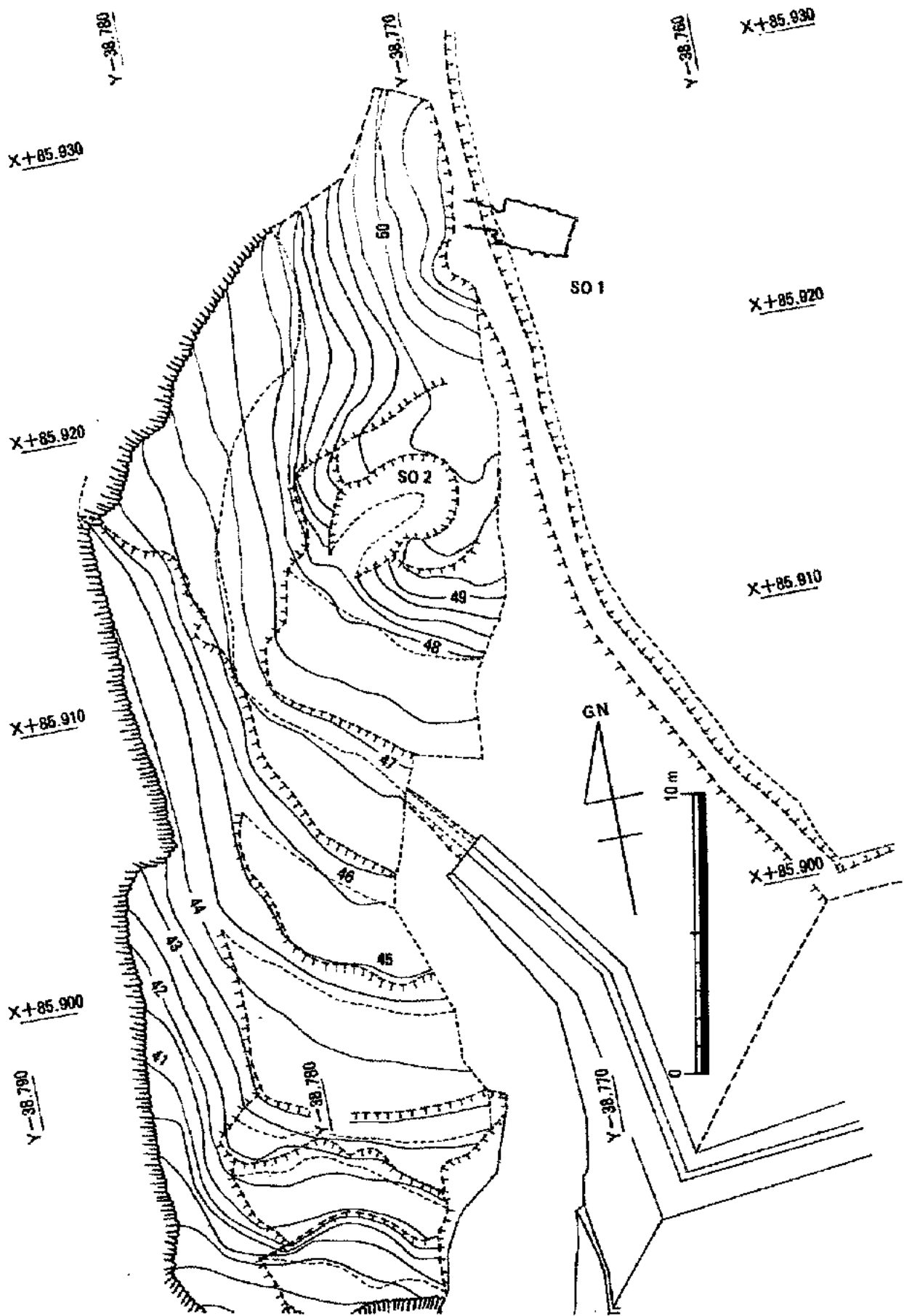
今回の調査は、まず、地形測量の成果から遺構の分布状況をとらえることから始めた。この作業により、既に運動場として造成が完了した当丘陵の基部から端部の尾根線には遺構の存在が希薄であることを予見させた。しかし、丘陵西斜面が現状を留めており、そこには歴然と西側に墓道の取り付く墳頂の陥没したSO2が存在している。また、そのすぐ北には、墳丘西裾部を残し、壊滅状態となったSO1を確認することができた。とくに遺構の存在が希薄であることを予見させた運動公園西辺に接するかたちで確認されたSO1は、運動公園で攪乱された中に辛うじてでも遺構の残存しているものがあることを期待させた。そこで、この運動公園内にどれだけの遺構が残存しているか試掘坑を設定し、遺構の残存状況を把握することにつとめ、SO1の主体部と丘陵東斜面の下り部分を検出することができた。これらの成果から運動公園内で検出した丘陵東斜面を調査区域の東辺とし、運動公園の西辺を調査区域の西辺とする調査区域を設定した。この調査区域は、K支群の形成されている南枝丘陵のうち、枝部から端部にかけての尾根線および西斜面部分にあたり、検出遺構は、SO1主体部と溝状遺構のSD3だけである。

1. SD1

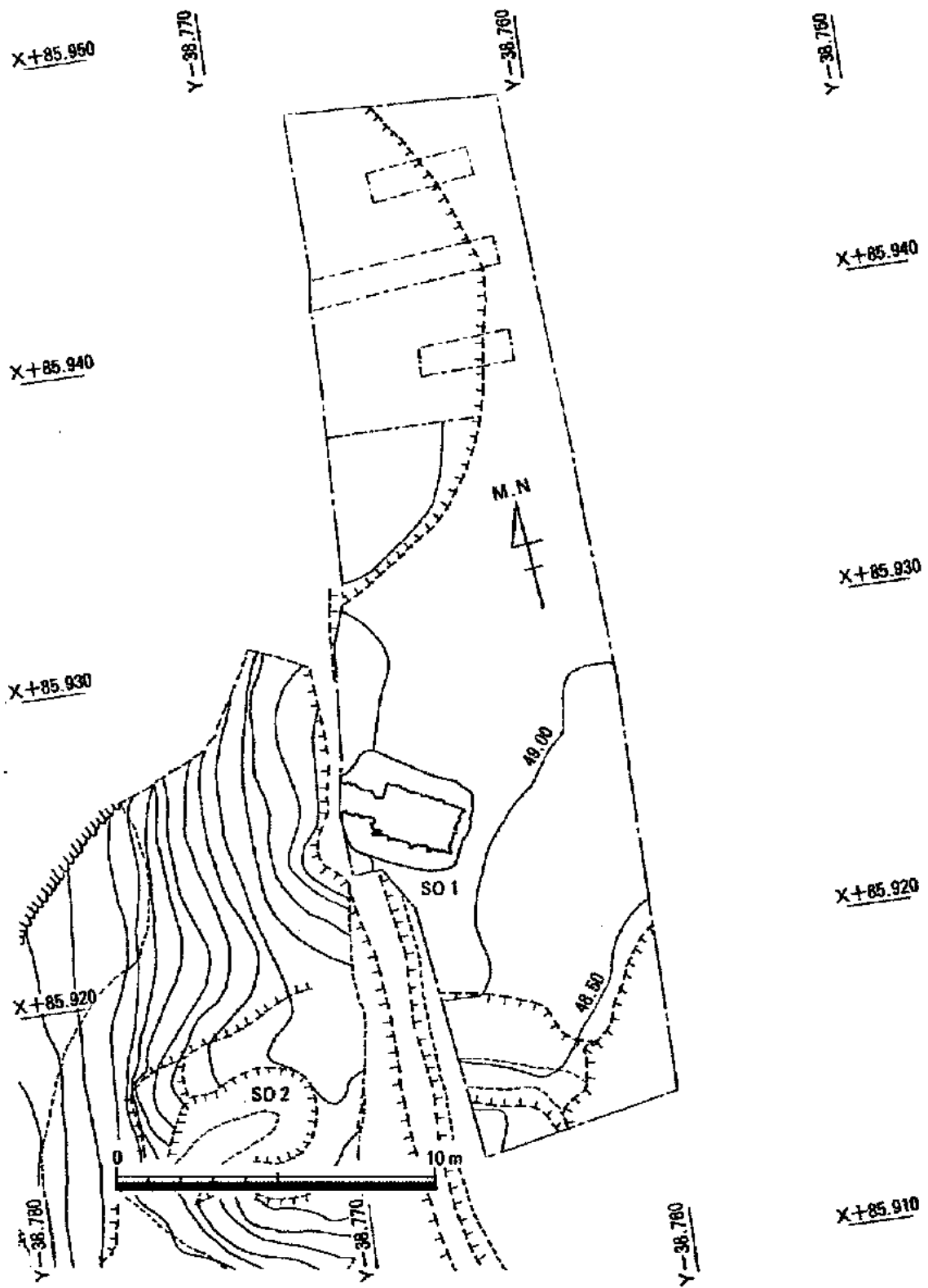
1) 遺 構

浦谷古墳群のK支群中SO2と伴に丘陵端部を占める古墳で、丘陵尾根線からやや西寄りに位置し、当調査区域の西辺に接して検出されている。直径約12mをはかり、西方向に開口する横穴式石室を内部主体とする円墳である。

墓 塚 調査区域内で墓道の付設される短辺右隅を検出できなかったが、長辺3.92m、短辺3.00mの長方形を呈し、西短辺には幅1.20mほどの墓道が付設されるものと想定される。墓塚底面は、奥壁と左右側壁の腰石を安定した状態でおさめるためか墓塚底周壁を10cmほど掘りくはめ、平面プランと同じような周壁状溝を造りだす。その法量は長辺3.20m、短辺2.48mをはかる。また、削り出された1石室床面となる台状の部位の法量は、長辺2.14m、短辺1.44



第4图 K区地形测量图 (1/200)



第5圖 地山整形圖 (1/200)

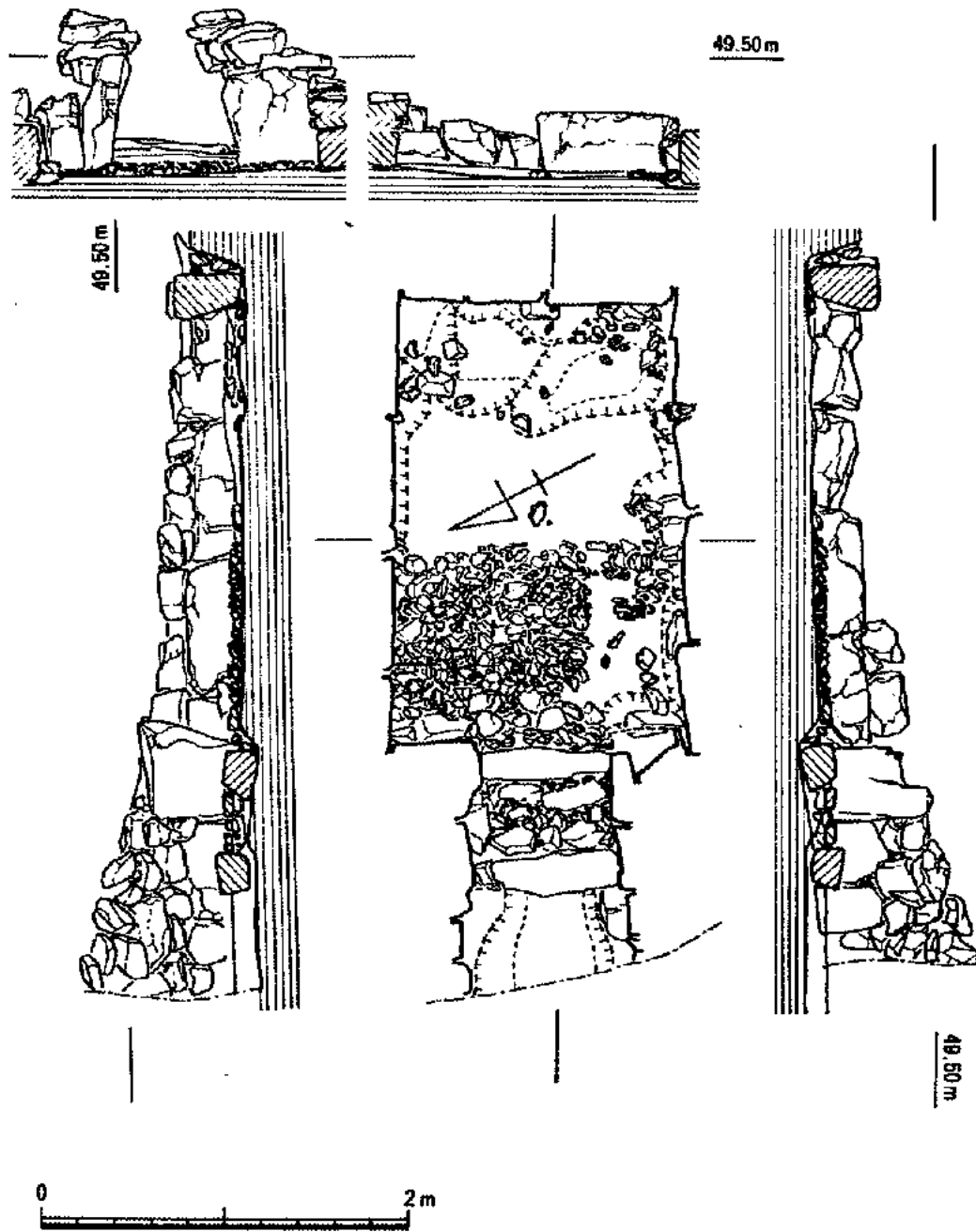
mをはかる。

石室 主軸をN-62°-Wにとる単室両袖の横穴式石室である。当石室は、羨道部・玄門部・玄室の3部から構成されており、現況では、石室の崩壊が著しく、玄室を構成する腰石および羨道部基底から5段ほどの石積みを残すだけで、他の石材は石室内に崩落している。古墳各部位の石材は、腰石は割石石材を横方向に立て長方形に整えてる。腰石上面の石材は、塊石を石室内から外に向けて縦長となるように積み上げている。古墳各部位の法量は、主軸上で計測して、全長3.82m、羨道部長0.96m、玄門部長0.45m、玄室長2.42m、羨道部幅0.85m、玄門部幅0.70m、最大玄室幅1.60m、玄室高0.45m、欄石高7cmをはかる。古墳各部位の構造は、以下のようである。

羨道部は、墓壇壁と玄門部のあいだに位置する。上部に天井石を高架する構造が本来の構造であるが、当古墳の石積み状況では天井石を高架していたものか確認できない。基底には、左右にそれぞれ2石の腰石を配し、その上段に塊石を積み上げ玄門部前面と墓壇壁とのあいだを補填するように乱積している。この構造は、石室玄門部から前方向にかかる上部圧を玄門2点支持から4点支持へと強化して石室の倒壊を防ぐものといえよう。床面には、欄石を前後に配し、その間を長さ30cm、幅10cmほどの角礫で覆い羨道部の中に2つの空間をつくりだしている。また、この角礫下には、地山を墓道方向に掘削して排水溝をつくりつけている。

玄門部は、玄室の前面を構成する門構造である。この門の基底となる腰石は、左右にそれぞれ1石ずつ柱状に石材を配している。その上段には、現状では石積みを見ないが、主軸方向に直行する石づかいで石材を積み上げ玄門上部を形成しているものであろう。玄門部床は、袖石間に主軸方向と直行する石づかいで1石の塊石を置き、石室を仕切る欄を構成している。この欄によって平面構造での羨道部と玄室は区切られている。

玄室は、平面形が長方形プランを呈しており、奥壁に2石、左右にそれぞれ4石ずつの腰石を配している。この腰石間には、それぞれ人頭大から拳大の石を配して根石となし、石室上部から各腰石にかかる圧力を分散する構造を備えている。床面は、拳大の石を全面に覆き敷石となしていたであろうが、現状は、その3分の1ほどが残存している。玄室を構成する壁面の構造については、その壁が崩壊しているため全容を明らかにすることができない。しかし、奥壁から袖石にかけての基底部は残存しており、玄室プランを構成している石積み構造については、その全容を明らかにすることができた。それは、2石の奥壁腰石と両袖石によって石室空間を定め、4石の両側壁腰石を両袖石の2分の1ほどの高さに配し、その上面を塊石積みして奥壁腰石上面と袖石上面を整えるという構造である。つまり、当古墳は、短辺1段、長辺2段の壁をもつ長方体を基底部としているのである。



第6図 SO 1主体部実測図 (1/40)

2) 出土遺物

石室床面は、盗掘時の擾乱によって敷石の2分の1を失った状況であった。よって、遺物の出土状況は、ほとんど現位置をとどめていないものと推測される。とくに玉類の出土は玄室内全体におよび盗掘時の擾乱の激しさがうかがいしれる。また、土器破片にしても、そのほとんどが検出されず完全な個体となるものはなく、当報告書で図示したものについても辛うじて器形がわかるだけで、その法量は推定復元によるところが大きい。

鉄器(第7図) 1は有茎の圭頭類に属する平根式の鉄鎌である。鋒は長鋒で50mmをはかる。身部断面は平造で、筧被部から基部に移行する筧被は茎に対してほぼ直角に交わっている。2は鉄鎌の筧被部の破片である。現存長45mm、幅9mm、厚さ4mmをはかる。

玉類(第7図) 3は製作時の切り難しさがうまくいかなかったものか二重の丸玉が連玉となっている。4~17は土製の丸玉である。いづれの玉も色調は黒褐色を呈する。18・19はガラス製である。18はその径に比べ厚みの薄いもので、色調は藍色を呈している。19は18に比べ小振りな丸玉で、色調は空色を呈する。

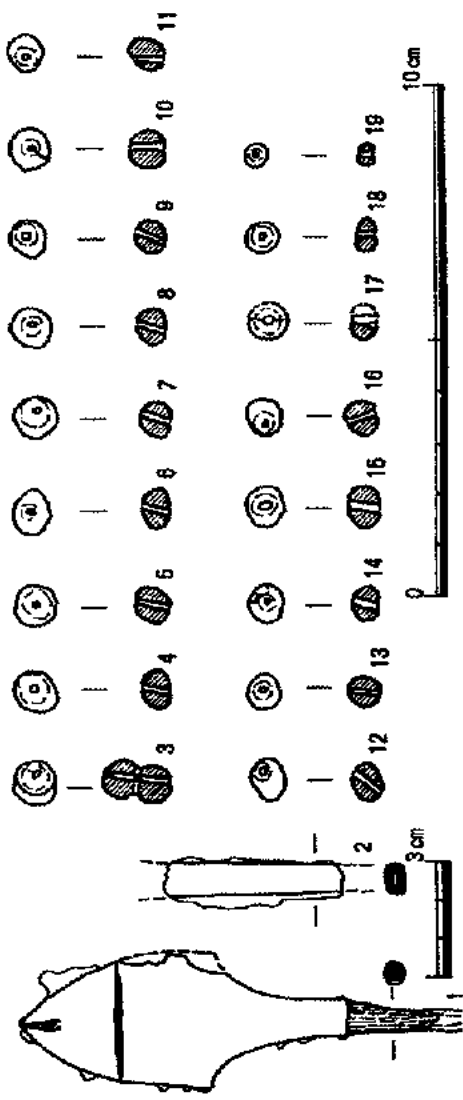
土器(第8図) 1は須恵器杯の破片である。器形は小振りで、立上部は先細りに引き上げられわずかに内傾し端部は丸くおさめている。口径9.0cm、立上高1.1cm、受部径11.0cmをはかる。器表の調整は、内外面とも横ナデ調整を施している。色調は、内外面とも青灰色を呈している。胎土は、1mmほどの長石砂粒が観察され、素地は青灰色を呈するものである。

2は土師器壺の破片である。器形は、個体が細かいため傾きなどについては不明であるが、底部から体部にかけて球を半分に切ったように立ち上がらせる器形であろう。器表の調整は、内面で底部から口縁部に向けて順次横ナデ調整を施している。外面は底部から体部にかけて静止ヘラ削り調整を施している。色調は、内外面とも黄褐色を呈しており、外面には一部黒斑反がみられる。胎土は、1mmほどの長石砂粒と黄白色砂粒が多量に観察され、素地は黄褐色を黒褐色で挟んだ色を呈するものである。

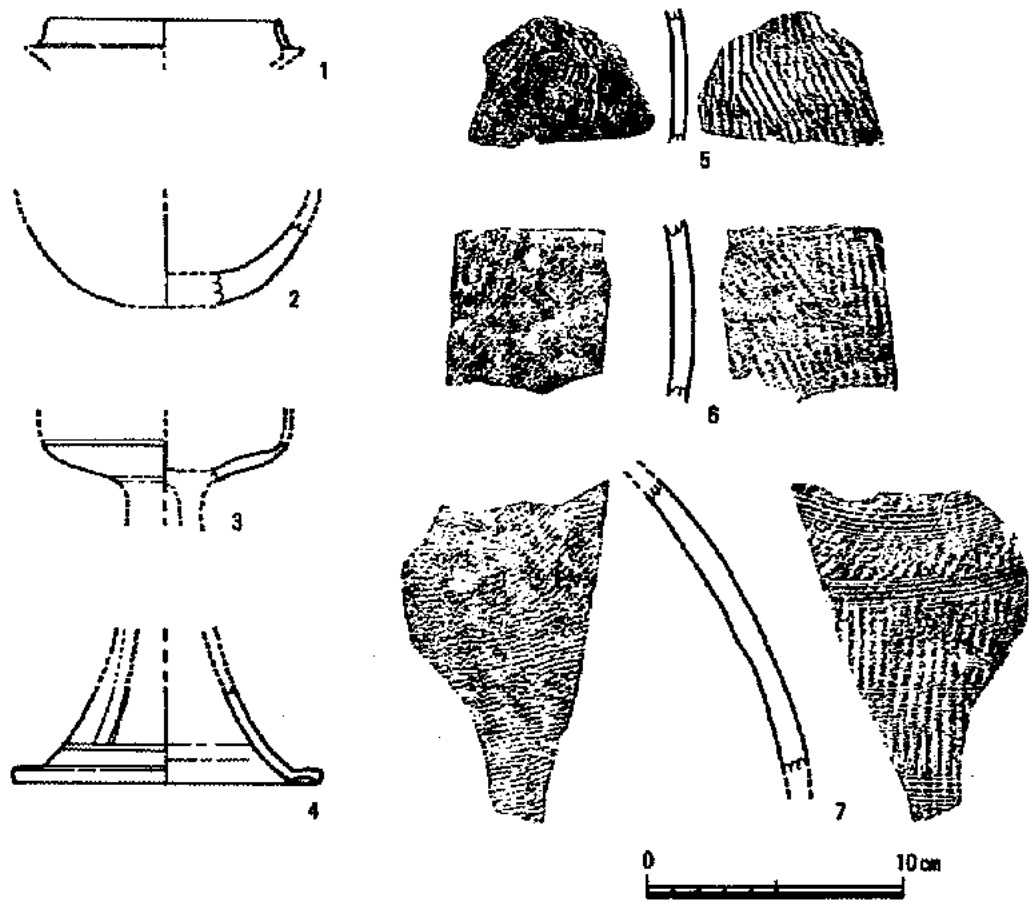
2. SD3

1) 遺構

当遺構は、調査区域南端で検出された溝状遺構で、丘陵東側斜面を南西方向から北東方向へ登り、尾根上を西進し、SO1とSO2の間を南西から北東へと分断するかたちで直進している。SO1主体部との間隔は、SO1主体部主軸中点から南へ5.50m離れたところにその北側壁上端があり、その形状は、断面が幅広の「U」字を呈している。法量は上端の幅3.70m、下端の幅1m、深さ約50cmほどをはかる。この遺構は、その形状からSO1の馬蹄形溝と想定することは難しく、他に用途を想定することになる。



第7圖 SO1出土遺物実測圖 (1/2・2/3)



第8图 K区出土遗物I (1/3)

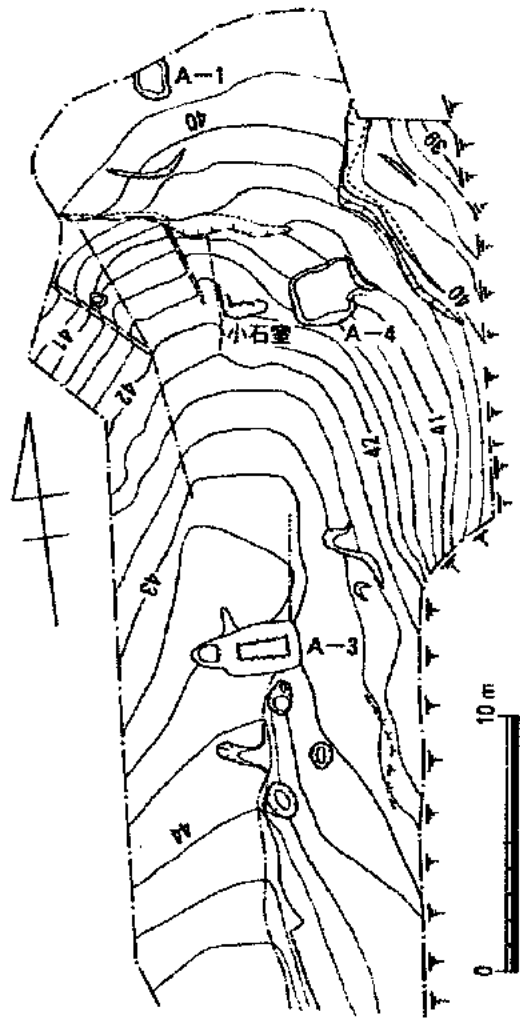
1) 出土遺物

当遺構からは数片の土器を検出している。いずれも調査区域の西よりで、遺構の北側壁の下方に貼り付くような状態で検出された。この遺物出土面の上面には暗黒褐色の粘質土が幅広く堆積している。

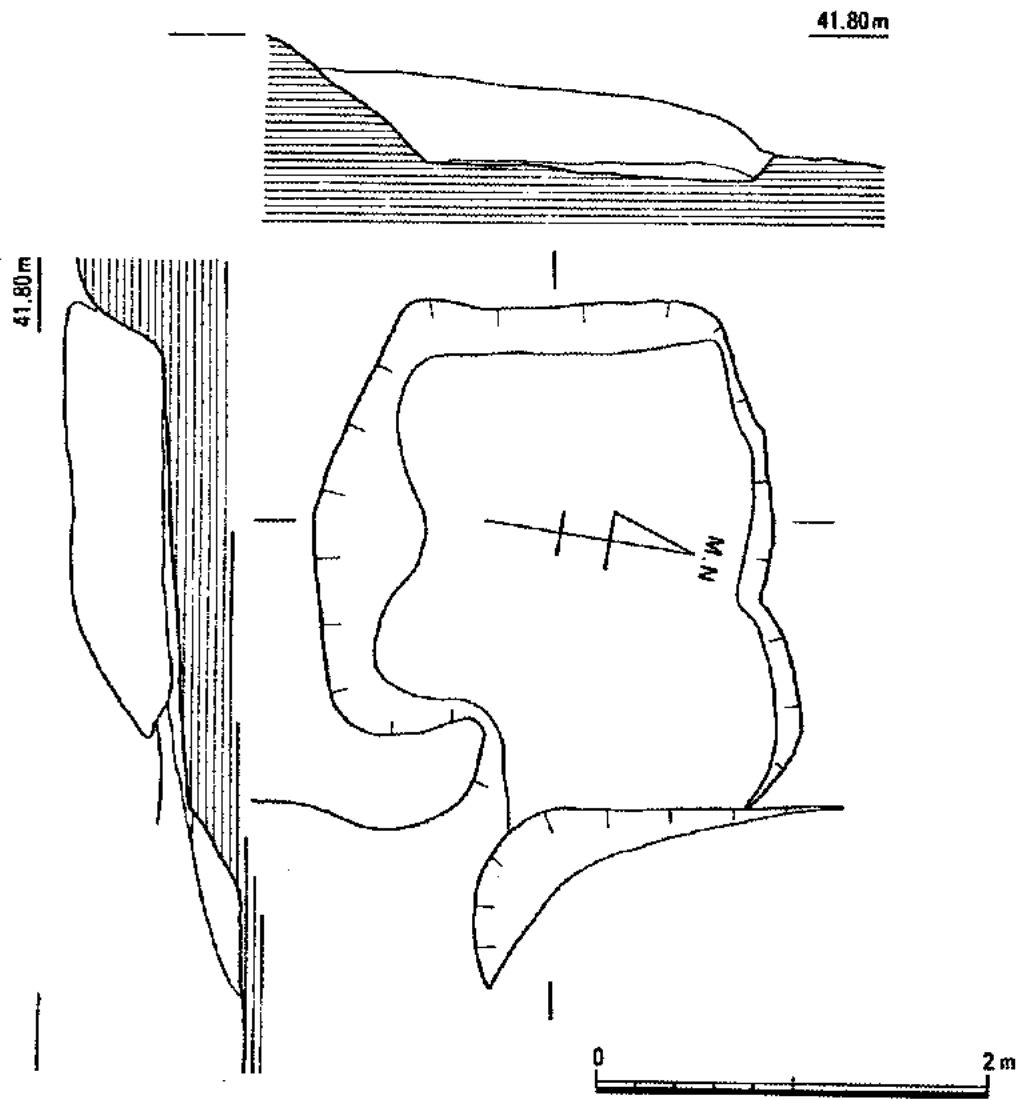
土器(第8図) 3は須恵器高杯の杯部の破片である。口径は約10cmほどで底部から体部に移行する部位に1条の沈線を巡らせている。器表の調整は、内外面とも横ナデ調整を施している。色調は、外面で青灰色を呈しており、内面は灰かぶりのため黄灰色を呈している。胎土は、微粒の長石砂粒が観察される緻密なもので、素地は紫灰色を呈するものである。

4は須恵器高杯の脚部の破片である。3方向に透し窓を開けているもので、裾部は「ハ」字形に開き、端部はいったん外方に引き伸ばした後に裾唇部の断面が三角形になるように屈曲させておさめている。その法量は、裾部径12.0cmをはかる。器表の調整は、外面で横ナデ調整を施し、内面は板状工具による回転のナデ調整を施している。色調は、内面で黒褐色を呈しており、外面は灰かぶりのため黄灰色を呈している。胎土は、微粒の長石砂粒が観察される緻密なもので、素地は紫灰色を呈するものである。

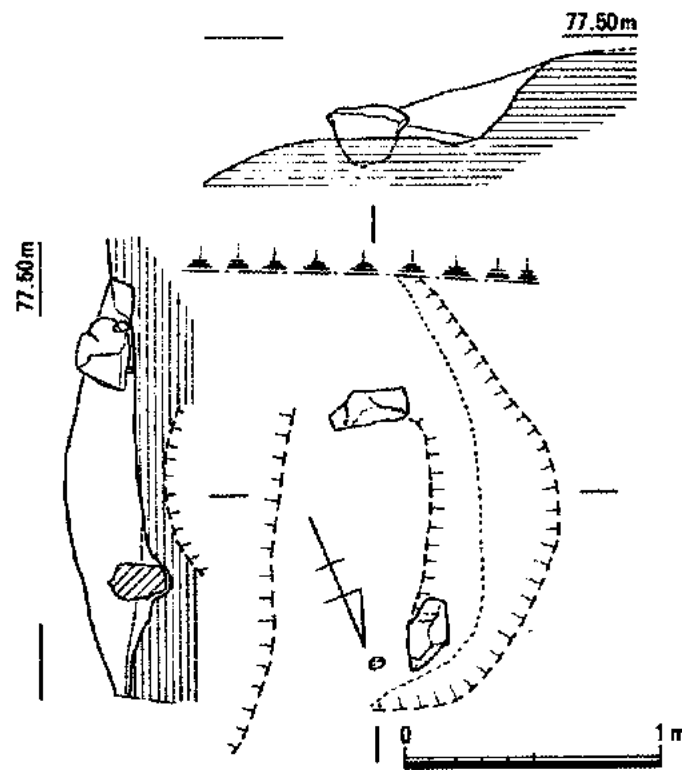
5～7はいずれも須恵器甕の破片である。5は外面に縦方向の平行タタキ調整を、内面に指による丁寧なナデ調整を施している。色調は、外面で暗い青灰色を呈しており、内面は灰かぶりの影響か青灰色に黄褐色の斑である。胎土は、微粒の長石砂粒が観察される緻密なもので、素地はあわい紫色を呈するものである。破片の傾きや部位については、復元不可能であるが、概ね胴部下半にあたろう。6は外面に縦方向の平行タタキ調整を、内面に板上工具によるナデ調整を施している。色調は、外面で黒灰色を呈しており、内面は灰かぶりの影響か紫灰色に黄褐色の斑である。胎土は、1mm前後の長石砂粒をが観察されるもので、素地はあわい紫灰色を呈するものである。破片の傾きや部位については、復元不可能であるが、概ね胴部下半にあたろう。7は外面に縦方向の平行タタキ調整の後カキ目調整を施しており、内面にはキメの細かい平行あて具痕が観察される。色調は、外面で灰色を呈しており、内面は灰かぶりのため黄褐色を呈している。胎土は、1mm前後の長石砂粒をが観察されるもので、素地はあわい青灰色を呈するものである。



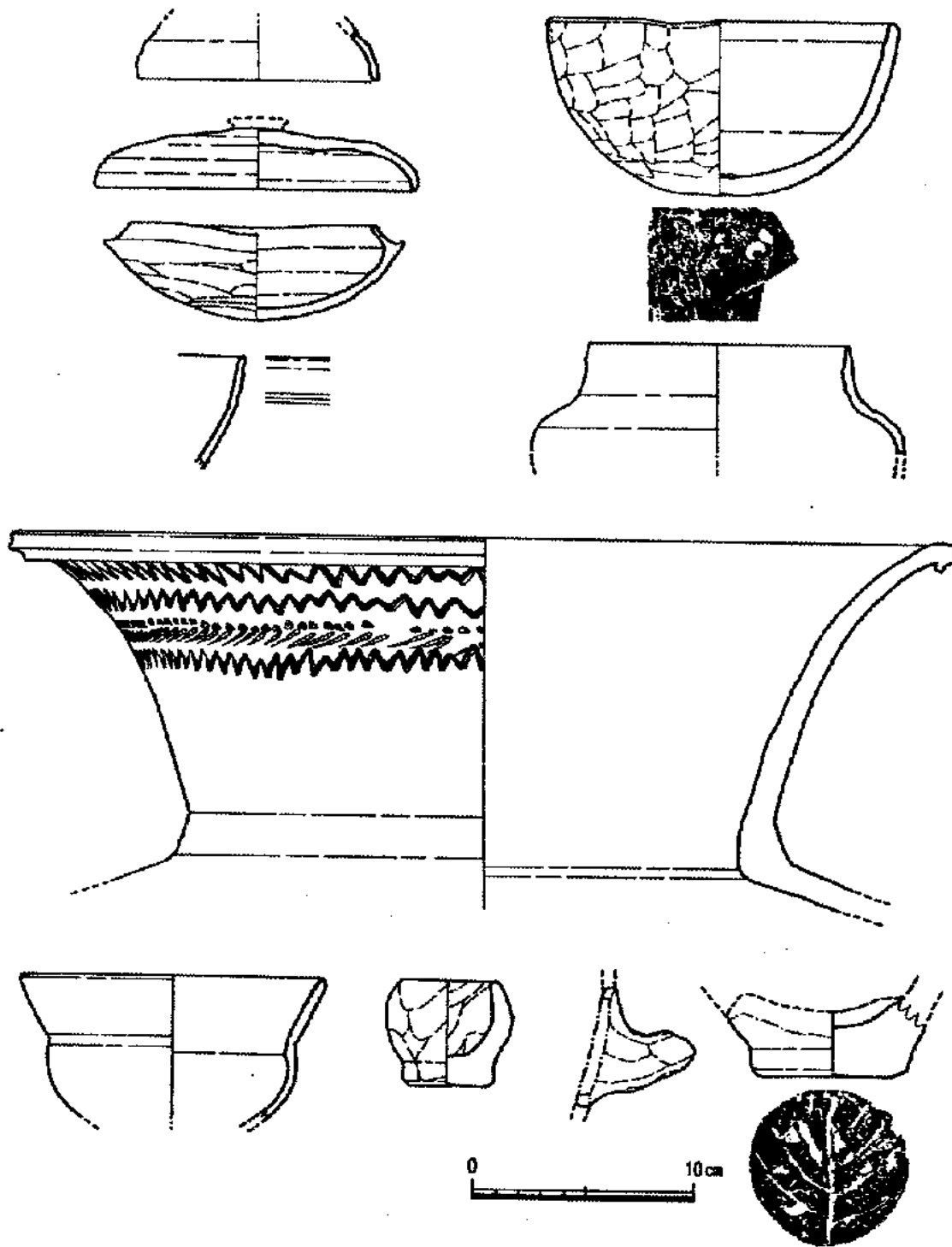
第9圖 浦谷古墳群A群地形測量圖(1/300)



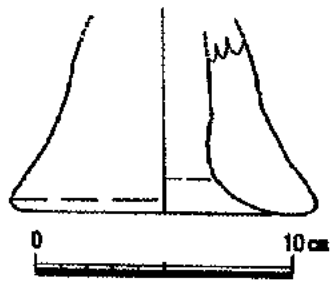
第10図 浦谷古墳群A-4号墳主体部実測図(1/40)



第11図 浦谷古墳群F群小石室実測図(1/30)



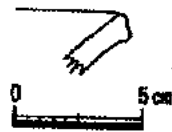
第12回 浦谷古墳群A区溜り出土遺物 (1/3)



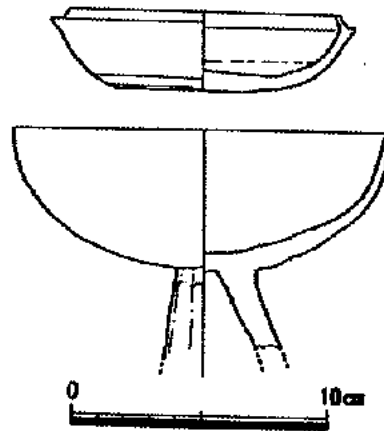
第13回 浦谷古墳群A区出土遺物 (1/3)



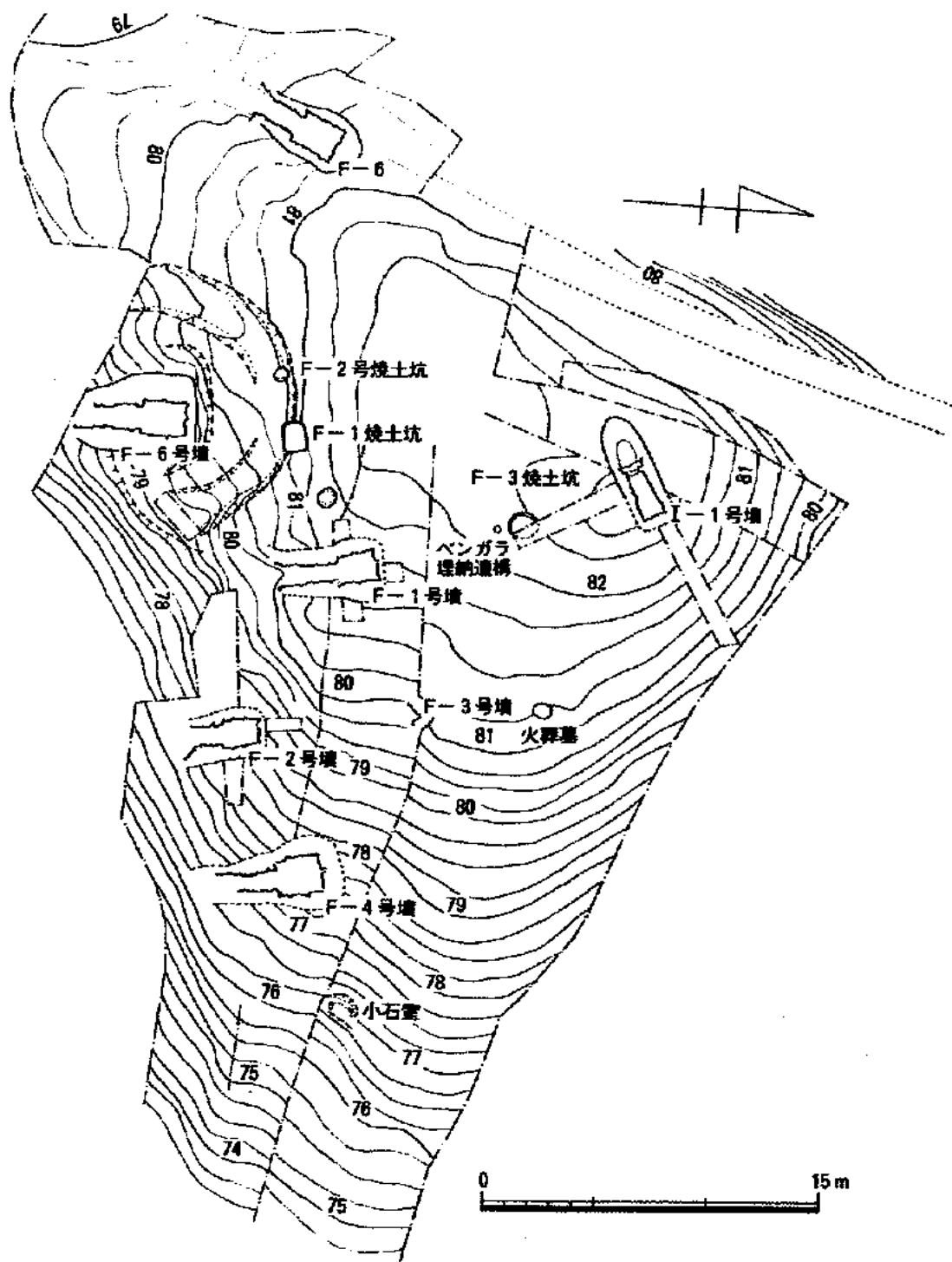
第14回 浦谷古墳群A区出土遺物 (1/3)



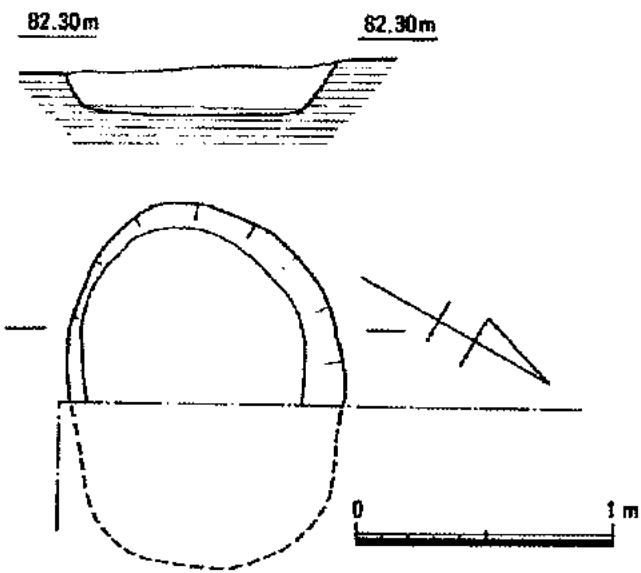
第15回 浦谷古墳群B区出土遺物 (1/3)



第16回 浦谷古墳群D区出土遺物 (1/3)



第17図 浦谷古墳群F・I群地山地形図 (1/300)



第18圖 浦谷F-3 焼土坑 (1/20)

第5章 ま と め

浦谷古墳群は、藤山から北西に派生する舌状丘陵のうち、最西端に位置する丘陵からさらに北西に延びる八手状の枝丘陵をもつ独立丘陵上に分布している。この独立丘陵は大きな5つの枝丘陵からなっており、このうち、丘陵頂部から東と西に派生する枝丘陵を除く3枝丘陵と丘陵頂部にA～Mの各支群が形成されている。

これらのうち、K支群が形成されている南枝丘陵が、運動公園の施工によって著しい改変を受けて遺構の分布状況や残存状況などをうかがいしることができなくなった。そこで、今回の発掘調査が実施されることとなった。

許斐山から北にのびる舌状丘陵のうち、王丸船差遺跡、前年度調査の王丸清勢A遺跡、そして、王丸清勢C遺跡などの分布する丘陵(第3図)で、現在、23基ほどの古墳が確認されているが、東西に走る国道3号線によって南北に分断されるかたちとなり、古墳の分布も王丸清勢A遺跡と王丸清勢C遺跡のあいだにかなりの間隔ができる観があった。今回、当遺跡の調査によって、古墳1基を確認し、古墳の分布間隔がつまり、丘陵地形から古墳の分布を大きく4区分できるようにみえるようになった。それは丘陵頂部を占める王丸清勢C遺跡の一群、丘陵基部を占める当遺跡の一群、丘陵枝部を占める王丸清勢A遺跡とその北に分布する一群、そして丘陵端を占める王丸船差遺跡の一群である。このうち丘陵枝部を占める一群は、前年度の調査で、その一部群構成を明らかにしている。また、今回の調査で、丘陵基部を占める一群の一部群構成を明らかにした。

圖 版



浦谷古墳群航空写真 (1/12,500) (A~Lは各支群)

図版 2



浦谷古墳群K支群遠景（西から）



浦谷古墳群K支群S01調査区（北から）



浦谷古墳群K支群S01調査区（東から）



浦谷古墳群K支群S01石室全景（西から）

図版 4



浦谷古墳群K支群S01石室玄門（東から）



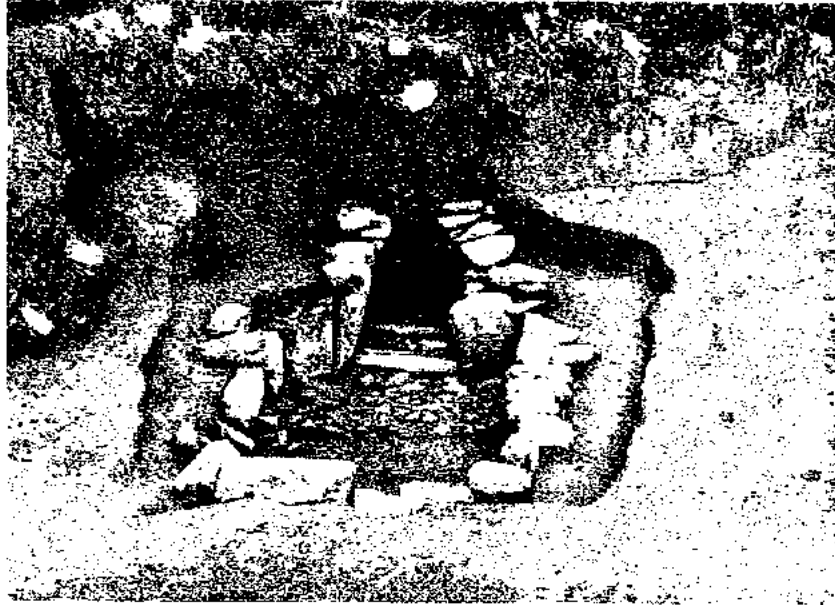
浦谷古墳群K支群S01石室左側壁



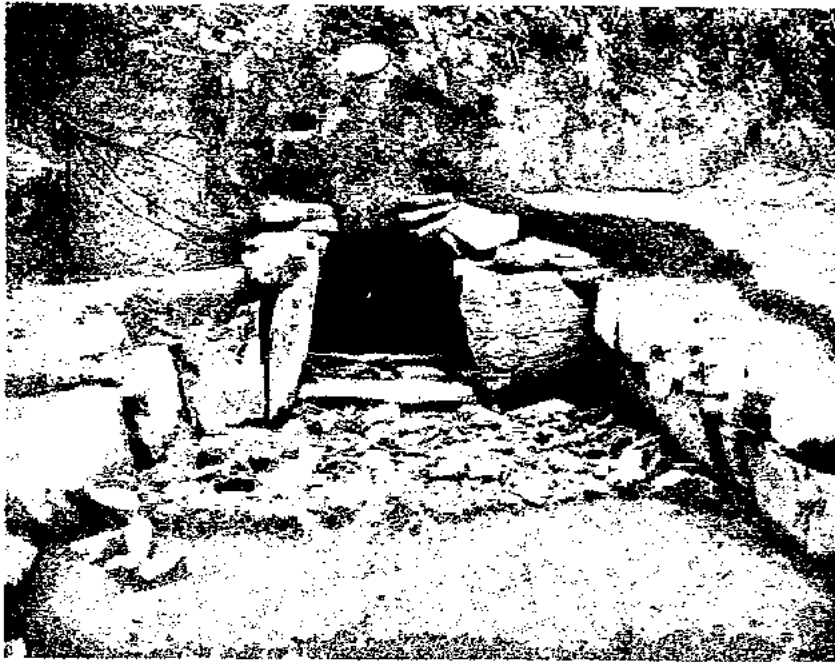
浦谷古墳群K支群S01石室右側壁



浦谷古墳群K支群S01石室奥壁



浦谷古墳群K支群SO1主体部（東から）



浦谷古墳群K支群SO1墓室土層



浦谷古墳群全景（北から）



浦谷古墳群D支群全景

図版 8



浦谷古墳群A支群小石室



浦谷古墳群F支群（左下の森林はK支群）

浦谷古墳群 Ⅲ

宗像市文化財調査報告書 第36集

1992年3月

発行 宗像市教育委員会
福岡県宗像市大字東郷995

印刷 有限会社システム・レコ
福岡市東区土井1-11-7